
メロウプリキュア！～もぎたて編～

遅れてきた誤才

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メロウプリキュア！〜もぎたて編〜

【Nコード】

N6458Y

【作者名】

遅れてきた誤才

【あらすじ】

オリジナルのプリキュアが大活躍します。

プリキュアのプレミアム感到にテンションが上がって勢いだけで書きました。

プリキュア大好きです

プリキュアのおかげで自転車に乗れるようになりました

（前書き）

プリキュアに対し、強いこだわりがある方は読むことをお勧めしません

世は魑魅魍魎が跋扈する時代。今日も闇夜に悲鳴が響く。
だが今は、その悲鳴を聞き、駆けつける者たちがいた。

ここは神奈川県某所。

終電も過ぎたころ、そこには暴漢と若い女性が居た

「ふへへへ！観念しなおじょうちゃん！」

「いやあ！せめてゴムはしてえ！」

しかし、それを静止する声が闇を裂く。

「そこまでよ！」

何者かと振り返れば、月を背に浮かぶ影が二人。
暴漢がそれを見て叫ぶ。

「何者なんだおまらは！？」

二人の影がにやりと笑う。

そう問われれば、答えてやるのが世の情け。

「通りすがりの光の戦士！」

その姿は可憐にして貧弱。

「キュアジョーカー！」

「キュアリバーシ！！」

天が呼ぶ地が呼ぶ俺が呼ぶ。

「メロウプリキュア！！ただいま見参！！」

だがしかし、それを見て彼らはこう答える。

「ババアじゃねえか！！」

そこには、どう見ても四十後半の女性が2名居た。

そう！彼女らはババアかもしれない！アラフォーなんて言っている
かもしれない！

中学生の子を持つ女性はプリティーにはなれないのか！？

ドモホルンリンクルを使わなければ肌もキュアできないのか！？
できる！できるのだ！

このストーリーは、二人の暇を持て余した主婦による、悲劇と栄光に満ちたプリティーでキュアキュアな日々の残滓である。

メロウプリキュア！もぎたて編

「とう！！」

二人がジャングルジムの上から飛び降りる。足から着地したところで、非常に痛々しい音が響いた。

「ぎゃおおおお！！！」

キュアジョーカーの悲鳴が響く。中年女性は極端にビタミンDが足りないため、非常に骨折しやすい体なのだ。

「ああ！大丈夫高橋さん」

「高橋じゃない！キュアジョーカーよ！」

ビシッとポーズを決めるキュアジョーカー、しかし下半身はガクガクしていた。骨は折れても心は折れない！それがメロウプリキュアなのだ！

「貴様、冬だというのにレイプとは精がでるわね」

その歳で半袖で膝までしかスカートで今外にいるお前らに言われたくない、と彼は思った。

「いやですわ精が出るなんて、レイプ魔だけに」

「きつと中だしですわ中だし」

淫語を一切の躊躇なく口にだすのも、メロウプリキュアの恐ろしいところである。

「エッチな犯罪許しません！お前みたいな奴は、ピンサロに変わって！お仕置きしてやる！」

「高橋さん！私の口上もとっておいてよ！」

「高橋じゃない、キュアジョーカー！！」

高橋は拳を構えて飛び出した。キュアジョーカーは身体能力を最大限に引き出す事で超人的な格闘が可能となるのだ。

「メロウキーク！」

キュアジョーカーのパンチが炸裂。彼は別にこの程度なら普通避けれたのだが、さっきからなんだか雰囲気飲まれてしまってなんとなく喰らってしまったのだ。

しかし、このパンチ、いや、キュアジョーカーの最大の恐ろしさはそのパンチそのものではない。彼女が必殺技名を口にするたび、口からすごい匂いがするのだ。どっかで嗅いだことあるなあと思えば死に考えを巡らせると、昔犬を飼っていた事を思い出した。

じゃあ彼女は普段犬食って生活しているのだろうか。

「私も負けていけないわ！」

キュアリバーシが持っていたカバンを漁ると、中から長ネギが出てくる。

「メロウアサルト！」

キュアリバーシ最大の能力は、持ったものを武器に変える能力である。その能力は、堅くて持ちやすければそれだけ強力になる！しかしあまり重い物は持てない。

「メロウスラッシュ！」

キュアリバーシが一閃すると、相手の身体には『ヨン様』と刻まれた。しかし、この技、いや、キュアメロウの最大の恐ろしさはその技そのものではない。彼女が必殺技名を口にするたび、口からすごい匂いがするのだ。どっかで嗅いだことあるなあと思えば死に考えを巡らせると、昔飼っていた犬のウンコを思い出した。

じゃあ彼女は普段犬のウンコ食って生活しているのだろうか。

彼の意識は既に動物園にあった。その機を彼女らは逃さない！

「今よキュアジョーカー！」

「キュアジョーカーじゃない高橋だ。あれ？いいのか？」

二人は向かい合い、手を握りあう。その手にゲム・ギル・ガン・ゴ
ー・ゲフオ。

「ネガティブハートにロックオン！」

相手の体が謎の奔流に縛られ、動きがとれなくなる。
これぞメロウプリキュア最強の必殺技『キュアメルト』、相手は死
ぬ。

二人の合体技が炸裂する瞬間、彼はムツゴロウ王国をみた。

だが、その時である。

ひとりの通りがかった少年が、その場に水を差した。

「なにやってるの母さん……？」

キュアリバーシの動きが止まる。彼女が振り向くと、そこには今年
中学に上がったばかりの息子がいた。

「よ…義久…？」

「なにやってるのキュアリバーシ！あのガキもろともキュアメルト
の餌食にしてくれるわ！」

ジョーカーが叱責すると、キュアリバーシはキュアジョーカーに蹴
りを入れた。

キュアジョーカーの断末魔の悲鳴が上がる。

「久義…これはね…」

キュアリバーシは気恥ずかしそうに言い訳をする。

「もうプリキュアは卒業するって約束したじゃないか！また警察の
お世話になりたいの！もうせつかく友達が出来たのにまたいじめら
れちゃうよ！」

キュアリバーシの目が泳いでいる。とてもバツがわるそうだ。

「うっさいんだよガキが！お前にこの情熱は理解できねえ！家帰っ
てモンハンやってろ！飯食ってモンハンやってろ！クソしてモンハ
ンやってろ！」

「独身貴族は黙ってる！」

メロウスラッシュで『韓流万歳』と刻まれ、キュアジョーカーは死

んだ。

「ごめんなさい久義…それでも母さんはひとりの…乙女なのよ…」

キュアリバーシは懷から煙玉を取り出し、地面に叩きつける。付近には煙幕が上がった。

「フハハハハ！今日はこの程度にしておいてやろう！」

キュアジョーカーの笑い声が響く。

「だが貴様がまた悪事を働くとき天が呼び地が呼び俺が呼ぶとき私達はきつとまた現れる！精々首を洗って待っている事だな！あとガキ、貴様はいつか殺す」

「高橋さん！とつとずらかるわよ」

「まあちよいまち、それから私の事を哀れんだ目で見るのはヤメロ！…！こう見えて私は繊細なんだ！次その目で私をみたら素の状態でメロウボルケーノを食らわすからな！絶対に許さないんだからな！」

「高橋さん！」

「はっ…！」

煙幕は風に流され、ほとんど流れていた。冷たい視線が二人を包む。
「これで勝ったと思うなよ！！」

二人は退散した。

キュアジョーカーは骨にヒビが入った脚を引きずりながら、キュアリバーシは心に致命傷を負いながら彼らは退散した。だが神奈川県
の治安は、多分護られた。

あと最近何故か近所に『痴漢注意』の看板が増えたり、回覧板がスルーされる事もしばしばだが、頑張れメロウプリキュア！世間に負けるなメロウプリキュア！彼女らの栄光の日々はまだ始まったばかりである。

《つづく》

次回予告

メロウプリキユアただいま推参！だが挑んだ相手が悪すぎた。メロウプリキユアは傷害罪で訴えられてしまう。

それはただの地方裁判だったはずが、何故か最後の決戦は最高裁に埋まる傍聴席に暴かれるプライベート。彼女らは正体を隠し通すことができるのか！？

次回、『陪審員との戦い』に御期待下さい。

追伸：読み終わったら、そっとブラウザを閉じてください

（後書き）

読み終わったら、何もいわず、そっとブラウザを閉じてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6458y/>

メロウプリキュア！～もぎたて編～

2011年11月19日21時38分発行